

2016年度学校自己評価

はじめに

現制度で9回目となる2016年度の学校自己評価は、従来と同様、各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照しつつ、授業・卒業論文・クラブ活動・研究活動等について評価し、さらに本学院内の教務室・各委員会・各学年・事務所等がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめて評価を行なった。2つめの生徒寮の建設工事が始まり、新体育館建設が決定した16年度であるが、本自己評価が17年度以降の教育・研究の改善に資することを望むものである。

I. 理念・目的

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を開拓している。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すとした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的であるが、生徒に対しては、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は16年度においても変わっていない。

II. 教育活動

①授業

a. カリキュラム

16年度は新カリキュラム適用2年目となった。新カリキュラムでは第1学年は音楽クラスと美術クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修し、第2学年からゆるやかに文系コースと理系コースに分け、文系コースは数学Ⅱ（3単位）と古典講読（2単位）を、理系コースは数学Ⅱ文系（3単位）と物理（2単位、うち1単位は「科学課題研究」）を履修することとした。16年度初めて実施されたが、理系コース選択者数が文系コース選択者数を上回る結果となった。新カリキュラム下では第2学年から第3学年の理系から文系への転向だけは無条件に認めるので、選択の幅を増やしておきたいという生徒が多かった結果であると思える。コース制は各コースに特化した授業を行なうことができるようになったと評価されている。

英語の外部テストとして、16年度は4月と9月にGTEC-S、TOEICを全校一斉に授業日に実施した。またTOEFLの導入もパイロットスタディ的に実施した。これらは学部からの学部推薦時の外部テストスコア提示を求める要請に応える方策もある。

b. 必修科目

16年度の必修科目の授業計画は、15年度の生徒の授業評価の結果を分析・検討に基づいて作成した。すべての教科において年度初めにシラバスを作成し、それに沿って授業が展開された。各教科で、第1学年では主に基礎力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識した授業、第2学年では充実・発展の観点からの授業、さらに第3学年では学部教育との連携を意図して授業が行なわれた。すべての学年で、生徒の授業評価の観点項目にある「わかりやすい授業」、本学院ならではのオリジナリティーの追求、探究や思考力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態が目指された。

英語では学部からの英語力の向上の要請を受けながら、説得型プレゼンテーションやエッセイライティング、アクティブラーニング等を取り入れた授業を展開し、国語でも教員と生徒が双方向から創り上げる授業がめざされた。地理歴史・公民科では常に大局的な観点に立って本質を問う授業を行ない、体育では心肺持久力・瞬発力・柔軟性に乏しい生徒が目立つようになったことに対応しつつ安全に留意した授業が展開された。また音楽では「のびのびと」「自由に」をキーワードに生徒に達成感を感じさせる授業を行なった。

c. 選択科目

旧カリキュラムの特徴として、第3学年に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第2外国語（仏、独、西、中国語、朝鮮語等）も含め7科目14単位を選択する形態であるが、16年度はその最後の年となった。各科目とも第1・2学年での必修科目の上に立って、生徒が主体的に展開する授業形態が多くなっている。「物理」「地学」では実験を中心とした授業、「政治・経済」「近現代の世界」「早稲田大学と文学」等では生徒の口頭発表と討議中心の構成となった。また「早稲田大学と文学」では早稲田大学への認識を強めることも企図された。さらにSGH活動の成果も授業に取り入れることも進められたが、本格的な導入は新カリキュラムとなる17年度以降の課題である。

d. 卒業論文

原級生も含め 350名が提出した。平均点は15年度と全く同じであった。ここ数年、卒業論文の評価が高すぎることが指摘されているが、問題は解決されなかつことになる。そのなかで「格差、貧困と政府の役割～より良い国民の生活をめざして」が学院賞を受賞し、「柳田國男『遠野物語』論」「明治・大正を駆け抜けた総合商社鈴木商店とは」「雷活動による宇宙線への影響」「高齢者に分かりやすい洪水ハザードマップの地図表現に関する研究」が「卒論報告会」と慶應義塾湘南藤沢中・高等部「論文実習オリエンテーション」で報告された。

卒業論文のための時間が設定されていないなか、各教員は論文リテラシーや資料の探し方、章立て、注のつけかたなどの論文の書き方の基本から、論の展開、結論の出し方まで指導した。その際、制度化されている中間報告の他、継続的な課題の提出を課したり、昼休みや放課後の時間の利用、あるいは夏期休業期間に集中してなど、個々の生徒の状況に合わせた指導を工夫した。またEメールやCourse N@viも重要なツールとなっていた。ただ授業外の時間のみでの指導には困難な面が多くあること各教員は感じていた。引き続き検討が必要である。

e. 卒業論文指導体制

卒業論文について、16年度は『卒業論文を書くにあたって』の改訂・評点高騰化への対処・書式の統一などの指導体制の改善を進めてきたが、まだ十全とはいえない。生徒の成果を校内外に公開すべきか否か、公開範囲やその方法などについての本格的な検討も課題として残る。

カリキュラム変更により、17年度第3学年から「総合的な学習の時間」の「課題研究」の時間を卒業論文指導に充てることが可能となる。本学院では開設当初から学部進学要件として卒業論文提出を課してきたが、これまで生徒が自身の追究するテーマを専門とする教員に直接依頼し、1対1で個別指導を受ける体制がとられてきた。そのため、指導方法や回数・評価にいたるまでの全てが担当教員の裁量とされ、評点や指導負担などの公平性においてバランスを欠くような現状を生んでいた。これを改善すべく、また、提出論文の質の全体的な向上も期待し、従来の担当教員による個別指導とあわせ、学年の生徒全体が同じ指導を受けることができる体制や内容を整えることとした。なお、授業時間内での卒業論文指導は、本学院における初めての試みである。

「課題研究」における卒業論文指導は、以下の3つの体制で行なうこととした。

ア. ライティング・センターによる全体講義

各学部の「アカデミック・ライティング」の指導を受け持つライティング・センター（早稲田大学グローバルエデュケーションセンター所轄）に講義を依頼し、承諾を得た（1学期2回・2学期1回の年間3回を予定）。論文とは何か？という基本知識について、剽窃・引用・資料の扱いについて、提出前の見直し方法について等、学問分野・領域に関わらず、学年の生徒全員が共有できる内容を予定している。

イ. 第3学年教員による全体指導

本学院が発行する執筆指南書『卒業論文を書くにあたって』や教科書『課題研

究メソッド』（岡本尚也編著、啓林館）等を使用し、第3学年の教員が論文指導を行う全体講義も取り入れる。高校生の実状に即した内容や、分野・領域に踏み込んだ指導を行なう。

ウ. ホームルームでの指導

執筆が終盤にさしかかる時期に、各クラス組主任によるホームルーム単位での指導を行なう。生徒同士が取り組み内容や進捗状況を共有できるよう、全員に自身の論文の内容についてプレゼンテーションをさせる時間などに充てる。

②課外教育

a. 稲稟祭

10月22日（土）・23日（日）に開催した。学外からの来場者は両日合わせて3700名程度で過去最多であった。運営は主に稲稟祭実行委員会（48名）によって行なわれた。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・本部企画で構成された。16年度は「稻翔」をテーマにいろいろな改革が生徒自身の力により行なわれ、15年度に引き続き校内装飾に力が入れられた。

b. 体育祭

6月2日（木）に実施した。4月から体育行事実行委員会を開き、準備を進めた。また陸上競技部員が審判員をはじめとする競技運営に携わり、実行委員と共に運営を行なった。100m・200m・400m・1500m・本庄スペシャルリレーの個人トラック種目、走り幅跳び・走り高跳び・砲丸投げの個人フィールド種目、障害物競争・パン食い競争・三人四脚競争の個人レクリエーション種目、大縄跳び・綱引き・クラス全員リレーの団体レクリエーション種目をクラス対抗で行なった。真剣に競技に臨むクラスメイトをクラス一体となって後押しする姿が本業の象徴である。新しいクラスでのコミュニケーションとまとまりが急速に進み、また第3学年生徒にとってはクラス対抗で行なう最後の体育行事であり、高校生活の思い出となる貴重な行事であると感じられた。

c. 球技大会

第3学年の修学旅行期間の9月29日（木）に第1・2学年で実施した。体育行事実行委員とバレー部・野球部・サッカーチーム部員が中心となり、準備や当日の審判等管理運営を行なった。男子はソフトボールとサッカー、女子はバレー部を各クラス対抗で行ない、各競技でのクラス優勝、各競技の成績を総合したクラス総合優勝を目指し真剣に取り組んでいた。

d. マラソン大会

12月15日（木）に実施した。体育授業の一環とし、男子約10km、女子約5kmの大久保山周辺をめぐるコースで行った。15年度の反省を踏まえ、男子コースの一部変更とスタート位置及びスタート方法の改善を行った。途中棄権者1名を除き、参加者全員が完走した。ゴール後の生徒とレース中の生徒の動きが重なり、やや混乱する場面があった。ゴール後の生徒の導線について、改善が必要となった。

e. 人権教育

「ジェンダーと人権」をテーマとし、生徒に「人の尊厳や相手を思う気持ち、自

己コントロール」を学ばせることを企図した講演会を10月5日（水）に実施した。二人の講師を招き、男女で別会場での同時開催という、例年ない形態の講演会となつた。

女子生徒対象の講演会では、講師の森田展彰氏（筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻社会精神保健科学分野准教授）によって、異性間ににおいても相互に尊重し合える関係づくりが重要であると説かれた。男子生徒対象の講演会では、講師の小西好彦氏（奈良初年刑務所教育専門官）によって、少年犯罪に対する心理学的原因分析を介して、幼・少年期に自尊感情を育むことが問題行動抑止の鍵となることが示された。

データDV研究・対応の第一人者による具体的な事例・観点を交えた講演を通じて、生徒にこれらの問題への関心・注意を喚び起こし、深く考えさせる良い機会となつた。

f. 芸術鑑賞教室

11月2日（水）、本庄文化会館にて芸術鑑賞教室が行なわれた。その内容は舞台「ヘレン・ケラー～ひびきあう者たち～」であった。東京から劇団を招き、2時間程度の公演を鑑賞した。生徒からは「ヘレンの心が解放された瞬間が感動的だった」「サリバン先生の情熱に心を打たれた」などの感想が挙げられ、生徒たちは経験の幅を広げたようであった。

g. 早慶野球戦観戦

5月28日（土）、入学後最初の学外学年行事として実施した。10時40分に神宮外苑絵画館前広場に集合し、11時過ぎに神宮球場学生席に入場した。高崎線人身事故の関係で到着の遅れた生徒はは後からの入場とした。本学院卒業生が、観覧席にも応援団・チアリーダーにも垣間見られて頼もしい。雨上がりの薄曇りは日差しも強くないため、熱中症・日焼け等の心配もほぼ無く、快適な観戦日和となつた。ライト側学生外野席の内野に近い所のため、ホームランの飛び込んで来るのも見易い場所である。試合は9-4で敗北したが、得点時は勿論その他の場面でも、肩を組んで「紺碧の空」を熱唱し、また各種の応援歌や蛇腹メガホンを打ち振る応援で喉を枯らし、早稲田マン（ウーマン）としての通過儀礼を堪能した。

h. 秋の学年行事

9月30日（金）に、⑦上野鈴木演芸鑑賞（22名）、①赤城山ハイキング（17名・バス1台）、⑦小諸懐古園・BBQリンゴ狩り（290名・バス7台）の3コースに分かれて実施した。⑦は鈴木演芸場前に13時50分に集合し、座席にて昼食を摂り、漫才・紙切り・落語等の演芸を楽しく鑑賞した。①・⑦は9時10分過ぎに共通棟前をバスで出発した。⑦は往復約2時間強の行程の地蔵岳登山を事故無く無事にこなし、雄大な赤城のハイキングを十分に体験できた。⑦は小諸懐古園を散策後、松井農園に移動。まずバーベキューでお腹を満たし、次に何種類かあるリンゴの食べ放題を楽しみ、16時過ぎ学院に帰投した。天候にも恵まれて日本の秋を楽しみ、仲間との親睦を深められた行事となつた。

i. 課外講義

保健関係の課外講義として、第1学年対象の「こころの健康」を6月16日（木）

に、第2学年対象の「青年期のセクシャルヘルス」を6月9日（木）に、第3学年対象の「性と生殖に関する正しい知識と最新の医療情報」を6月23日（木）に実施した。

16年度は昨今の高校生の健康問題を鑑み、各学年で実施する内容を検討した結果、従来第3学年対象に実施していた内容を第2学年を対象に実施することとした。17年度は飲酒・喫煙・薬物乱用予防についての講義を、第3学年を対象に実施することとする。

4月20日（水）に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全」講義を実施した。本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行と登下校中の防犯に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。講和の中で防犯に関する内容を扱ったのは14年度からであり、16年度が3度目であった。

③課外活動

a. 生徒会活動

「生徒会活動」は生徒会公認団体活動（部活動）や生徒会の専門委員会活動など生徒会の活動すべてを指すこともあるが、ここでは選挙によってえらばれた生徒会執行部の役員たちの活動について述べる。主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲穂祭生徒会ブースの運営であった。16年度の執行委員、前年度に引き続き、生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。特に、15年度執行部から引き継ぎ、16年度執行部も自らの企画・運営によって「献血ボランティア」を行なった（9月14日（金））。これは16年度と同様、赤十字血液センターへの問い合わせから、学院生への協力依頼までを生徒会の企画・運営によって行なう、ということであった。本庄市内の高校の合同文化祭である「六高祭」について、学内の調整や他校との連携の窓口を務めるのも生徒会執行部の役割となっている。

b. クラブ活動

16年度は15年度と同様、文化部門25、体育部門16のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲穂祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。各クラブの16年度の主な成績、活動状況は次の通りである。

・硬式テニス インターハイ男子シングルス2回戦進出

男子ダブルス1回戦進出

・サッカー 全国選手権県大会ベスト32

・スキー インターハイ・高校選抜大会女子1大回転・回転出場

関東大会男子1・女子1出場

・ソフトテニス（女子） 男子との練習で成果

・バスケットボール（男子） 県北選手権大会6位

・バスケットボール（女子） 県北選手権大会5位

- ・野球 全国選手権県大会ベスト16
- ・ラグビー 県大会ベスト16
- ・陸上 高校総体男子8種競技出場
北関東大会女子槍投げ出場
関東新人大会女子走り幅跳び2位
県新人大会男子400m・1600m入賞
- ・E M A N O N 部員間の親睦を深める
- ・E S S HPDU新緑杯個人ディベーター賞3位
HPDU埼玉県予選会個人ディベーター賞10位
HPDU Competition参加
- ・グリークラブ 部員増え明るい雰囲気
- ・軽音楽 演奏技術の向上、部員間の親睦を深める
- ・政治経済 コンテスト参加、校外学習合宿、地元製菓店と連携した文化祭での販売及び地域PR
- ・ディベート 「ディベート甲子園」ベスト16
- ・ブラスバンド 吹奏楽コンクール地区大会A部門銅賞
アンサンブルコンテスト、定期演奏会、稲稜祭、ボランティア活動、国際交流・式典等の各種依頼演奏

④国内外交流・研修

a. 修学旅行

16年度の修学旅行は、北京・台湾・韓国の3コースで実施した。15年度はMERSの影響により韓国コースの行先が台湾へ変更となつたが、今年度は予定通りであった。生徒はそれが希望したコースに参加した。コース別的人数は北京コース55名、台湾コース 111名、韓国コース 167名となり、不参加者は21名（そのうち多くは公式大会と重なつたラグビーチーム）であった。

事前学習は主にコース別に行なわれ、外部講師による講演や班別の研修課題設定、交流の準備などがLHRの時間を使って進められた。これらにより、各コースとも現地では充実した時間を過ごし、貴重な体験を得ることができた。

北京コースでは、北京大学附属中学との1日交流（学校での授業参加や文化交流、答礼晚餐会）だけでなく、北京大学在学の現地学生との2日にわたる交流が実施でき、参加した生徒たちにも非常に好評であった。

台湾コースは、大型台風直撃の影響で大幅な行程変更を余儀なくされ、国立台中第一高級中学への訪問も予定どおり実施することができなかつたが、それでもホテルを会場にした小規模な交流を行ない、貴重な時間を過ごした。

韓国コースも、訪問予定だった安養外国语高等学校の都合により急遽交流がキャンセルとなつたものの、代替として行なつた韓国大学生との交流は好評であった。SGHのプロジェクトで交流した安養外高の生徒とも再会も一部実現できた。

このように、限定期的な条件ながらも異文化交流の体験を組み込むことができ、生徒にとっては国や文化を越えた共存共栄の在り方を考えるきっかけとなつたといえる。事後アンケートからも、生徒の総合的な満足度は高いと評価できた。今後は、

天候や交流相手校の事情、クラブ活動の公式大会日程など様々な要素を踏まえつつも、多数の生徒が参加できる日程を策定していくことが望まれる。

b. 海外からの訪問交流

1) S S H 関連

10月24日（月）～31日（月）にNational Junior College（シンガポール）の生徒9名・教員2名が滞在し、軽井沢セミナーハウスでの合宿を含む本学院での共同研究や授業体験、交流会を実施した。

2) S G H 関連

8月3日（水）～6日（土）にSMA N2 Yogyakarta（インドネシア）の生徒2名・教員1名が滞在し、富岡フィールドワークを含む共同学習や歓迎交流会を実施した。

12月19日（月）～22日（木）にPre-WaISEC参加者として北京大学附属中学（中国）から生徒4名・教員1名、国立台中第一高級中学（台湾）から生徒4名・教員2名、安養外国语高等学校（韓国）から教員1名・生徒4名、ハナ高等学校（韓国）から生徒4名・教員1名が来校した。国内からの参加校3校（立命館高校、大阪教育大学附属高校平野校舎、早稲田大学高等学院）とともに研究発表、ポスターセッション、近隣3カ所へのフィールドワークを含むアイデアコンペに取り組んだ。

3) 授業内での交流

国際教養学部のAIMS7プログラム参加者で、春学期に早大で学んでいるASEAN諸国7大学の学生のうち17名が学部職員2名と共に「本庄でのフィールドワーク」の一環として来校。3年生選択科目「英語ディスカッション（上級）」の授業に参加し、大変活発な討論の時間を持った。

また、3年生選択科目「政治・経済（演習）」で韓国のユネスコスクールの1つであるカオン高校とネットを介した協働学習が実施された。

4) 海外校の教員の来校

Mahidol Wittayanusorn高校（タイ）、カオン高校の教員が来校し、授業見学および教員との今後の連携に関する懇談を行なった。

c. 留学

16年9月から第2学年女子生徒1名がドイツへ留学した。早稲田大学附属・系属校プロジェクト推進室の支援による短期留学として、スイス公文國際学園（Kumon Leysin Academy of Switzerland）のSummer In Leysinプログラムに1名、UC Riverside校企画のプログラムに5名が参加した。16年度には海外からの長期留学生はいなかった。

⑤ S S H（スーパーサイエンスハイスクール）

本学院は02年に本制度開始とともにその指定を受け、以後、05年に再指定、10年に再再指定されて現在に至っており、全国のS S H校の中で最古参である。15年度、16年度は経過措置校として活動を継続した。16年度実施した主な活動等は以下の通りである。

1) 河川調査プロジェクトおよび本庄市立藤田小学校との連携活動

本学院は09年度より、大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・地元N P O法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内2河川の環境調査活動を実施している。16年度も藤田小学校との連携で春秋2回実施した。

2) 藤田小学校の年間講師

12年度より、本庄市立藤田小学校5・6年生の年間総合学習の講師を本学院生徒がつとめている。内容は、河川生物や環境に関わる事、科学への興味関心を高める事、プレゼンテーションスキルを中心としている。16年度は計10回の授業を行なった。また藤田小学校の文化祭である「藤っ子祭」でも本学院の生徒が講師を務めた。

3) Singapore National Junior College (NJC)との交流活動

7月29日（金）～8月7日（日）に生徒9名をシンガポールに派遣し、様々なプログラムを実施した。交流の軸は共同研究であり、3つのテーマについて実験・ディスカッションを行なった。10月24日（月）～31日（月）にはNJCからの生徒・教員11名を本学院に受け入れ、各種博物館におけるワークショップ、オリンピック青少年センターにおける合宿交流、授業交流・文化交流・共同研究ミーティング、実験教室、河川調査などの科学教育プログラムを行なうとともに歓迎お茶会等の文化交流を行なった。

4) Mahidol Wittayanusorn School(MWITS)との交流活動

9月26日（月）～10月3日（月）にMWITSの生徒10名教員2名が本学院を訪問し、生徒と科学交流・授業交流・文化交流を行なった。また1月24日（火）～31日（火）には生徒9名をタイに派遣し、研究発表・授業交流・教員研修を行なった。

5) 日韓青少年水フォーラム

7月26日（火）～29日（金）に韓国水原市で日本と韓国の青少年が集い、水環境を考えるフォーラムが開催され生徒4名が参加し、日韓の水環境に関する発表や施設見学、グループ討論などを行なった。

6) BeiHang Experimental School INTERNATIONAL SCIENCE FAIR・台湾高雄研修

それぞれ7月24日（日）～8月1日（月）、12月21（水）～24日（金）に北京と高雄で、立命館高校人材育成重点枠プロジェクト連携校として参加した。

7) Japan Super Science Fair (JSSF)

10月31日（月）～11月5日（土）に立命館高等学校が主催した大規模な国際高校生学会JSSFに生徒3名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち1名はNJCとの共同研究発表であった。

8) SSH成果報告会

本学院のSSH事業成果の社会還元を目的とし、成果報告会を11月16日（水）に開催した。

9) Thailand International Science Fair 2017 (TISF)

1月5日（木）～1月10日（火）にタイのMahidol Wittayanusorn School (MWITS) を会場として行なわれた科学フェアに参加し、研究発表を行なった。

10) SSH生徒発表会

8月9日（火）～11日（木）に生徒3名が神戸で行なわれたSSH生徒発表会で

ポスター発表を行なった。

11) いい川・いい川作りワークショップ

9月9日（金）～11日（日）に岡山県で行なわれたワークショップにおいて、

「本庄市内河川における外来エビの汚染状況とその理由」の研究により森清和賞を受賞した

12) 本庄市民シンポジウム

3月11日（土）に以下のテーマで本学院生徒が講演を行なった。

「本庄市内河川における外来エビ・在来エビの状況とその理由」

「地域における、これからの学校の役割」

13) 川の日ワークショップ関東大会

「本庄市における河川エビ（ヌカエビ・ヌマエビ類）の分布状況とその考察」というタイトルの研究発表を行ない、優秀賞を受賞した。

14) 親子科学教室

S S H事業成果の地域還元を目的とし、毎年夏冬の2回（出張授業を含む）、本学院実験室で親子科学教室を開催している。16年度は7月29日（金）、12月27日（火）にのべ8講義（各講義親子20ペア）を行なった。

15) 各種講義等

S S H輪講「これがサイエンスだ！」（5回）、「これがデータ分析だ！」を行なった。

16) 表彰・成果

- ・いい川・いい川作りワークショップにおいて、「本庄市内河川における外来エビの汚染状況とその理由」の研究により森清和賞を受賞した。
- ・藤田小との本庄市内環境保護活動における連携に対して彩の国埼玉環境大賞優秀賞を受賞した。
- ・以下の2本の査読付き論文が雑誌に掲載された。

「電気解析法を用いたセシウムイオン分離に関する研究」（『慶應義塾大学日吉紀要、自然科学』60

「光学・電子顕微鏡によるクワの葉プラントオパールおよびその不均一分布の観察」（『ジャーナル「表面科学」』37-10

⑥ S G H（スーパーグローバルハイスクール）

本学院は制度開始2年目となる15年度に初めてS G Hの指定を受けた。構想名には「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」を掲げ、初年度はコア人材の育成及び構想の核となるマイクロプロジェクトの基盤作りに努めた。2年目となる16年度は、それらを推進し、具体的な実践に結び付けることに力を入れた。特に、12月に行なった「Pre-WaISEC」は本学院のS G H事業の中間的な成果として位置づけられる。中間評価を控える17度には、授業と連携したプロジェクトの推進や、プロジェクトの計画・実行だけでなく評価の手法の開発と、それをもとにした改善というサイクルの確立が重要であろうと考えられる。

1) コア人材の育成

15年度に立ち上げたSGH Senior Staffを発展的に改組し、各プロジェクトのリード者としての役割を明確化した。

ダーグループと、12月実施のPre-WaISEC実行委員会を設置した。これらの生徒をSGH事業推進のためのコア人材として位置づけ、ミーティングを重ねながらプロジェクトの実行と育成にあたった。これらの生徒を中心に、稲穂祭での展示発表やインターネットベースでの各種広報活動、プレゼンテーションなどを行なうことができた。

2) SGH授業と教科間連携

第2学年必修科目「政治・経済」（2単位）のうち1時間はSGH授業として位置づけ、同じく第2学年必修科目「コミュニケーション英語」と連携した、グループワークによる探求型学習を進めた。具体的には、地球温暖化や安全保障などのグローバル・イシューに関する問を立て、フィールドワークや文献調査を通じて主張を論証し、中間報告を経て英文ポスターにまとめるというもので、この成果は12月のPre-WaISECにおいて発表された。授業において学年全員が関わる形で、かつ複数教科の連携によりSGH事業を進められたことは16年度の大きな成果であった。

また、英語科の授業においては個別やグループによる説得型プレゼンテーションの実施、エッセイライティングのピア評価などを実践し、英語運用力の向上の取り組みを継続した。

3)マイクロプロジェクトにおける国内外生徒派遣

15度に引き続き、授業内外でのマイクロプロジェクトを継続して実施した。これは、少人数のグループにより行なうプロジェクトの各局面を通じて、国際共生パートナーシップ構築に必要な力を育てようと企図するものである。特に16年度は国内外8件（うち国外7件）のフィールドワークを実施し、56名の生徒を派遣することができた。

ア. グローバル社会と人権（沖縄）

15年度に引き続く沖縄フィールドワークでは、歴史認識をテーマに巡検した。

16年度新規SGH指定校である那覇国際高校をパートナーに、共同でミニフォーラムを実施した。

イ. 紡績業を軸とした教科横断型授業（上海）

日中関係史などに関する事前学習を経て、紡績業を中心テーマとする4日間のフィールドワークを行なった。計画していた江蘇省蘇州中学との交流は実現できなかったが、生徒がそれぞれ設定した課題にしたがって充実した現地調査ができた。

ウ. インバウンド観光プランの協働学習（シンガポール）

パートナー校であるSingapore National Junior College（NJC）への訪問

・学習交流を中心とするシンガポールフィールドワークを行なった。現地でのインタビューや観光地調査などを実施した。

エ. ワールドユースミーティング（WYM）参加／オンライン交流で進める発信型プロジェクト（インドネシア）

日本福祉大学主催のWYM（8月）に参加し、SMA N2 Yogyakarta（インドネシア）との協働研究・発表を進めた。オンラインコラボレーションに加え、16

年度は同校を訪問しての交流を実現させ、英語雑誌F Pの協働制作につなげた。

オ. 安養外国語高校とのテーマ学習型交流（韓国）

朝鮮での植林事業で知られる浅川巧の思想をテーマとして、安養外国語高校（韓国）との学習交流を継続した。8月に韓国を訪問して共同フォーラムを開催し、大きな成果を得た。

カ. 国際共生学を踏まえたボランティア活動（フィリピン・ネパール）

事前学習や研修会を経て、マングローブ植樹を主なテーマとする自然問題班（フィリピン）・貧困と少女人身売買を主なテーマとする社会問題班（ネパール）がそれぞれフィールドワークとボランティア活動を現地N G Oなどと連携して行なった。

キ. 国際高校生シンポジウム（韓国）

7月に行なわれた韓国ソウルHana Academy Seoulの国際シンポジウムに生徒を派遣した。事前に示されたテーマに沿ったプロポーザルを作成し、プレゼンテーションとディスカッションを行なった。成果は本学院のPre-WaISECの企画・運営に生かされた。

4) Pre-WaISEC／成果報告会

12月19日～22日に、国際高校生学会Pre-WaISEC（Waseda International Symposium on Education and Culture）を本学院において開催した。海外校4、国内S G H校3を招待し、基調講演、オーラルセッション、ポスターセッションに加え、複数の国・学校の生徒がチームを組んで競うコンペティション（コラボレーションプログラム）を実施した。共通言語はすべて英語であり、近隣の宿泊施設を利用して合宿型で行なった。また、国内外派遣を含む各マイクロプロジェクトの成果報告会としても位置付け、ポスター発表も含むと400名以上の生徒が参加した。生徒実行委員会は6名の執行部を中心に約50名で構成され、主体的・組織的に準備を進めた。

⑦高大一貫教育

a. 学部説明会

第2学年を対象に、5月28日（土）に早稲田キャンパス・西早稲田キャンパス・戸山キャンパスで例年同様午前中と午後の部に分けて各学部からの説明を受けた。早稲田キャンパス14号館に8時50分に集合、出欠確認の後、商学部、政治経済学部、法学部、国際教養学部、社会科学部の順で20分ずつ説明を受けた。午後は移動を含めた70分の休憩の後、理系志望者は西早稲田キャンパス、文系志望者は戸山キャンパスへそれぞれ移動した。理系の基幹理工学部、先進理工学部、創造理工学部については、現在理工3学部及び教育学部理系に在籍する本学院卒業生によるパネルディスカッションとキャンパス見学会を行なった。文系志望者は文学学術院教員から文学部と文化構想学部の説明を受けた。

また9月30日（金）には所沢キャンパスにて午前中に入間科学部、スポーツ科学部説明会、卒業論文ガイダンス、午後から教育学部説明会とキャンパスツアーを行なった。

集合、移動について、5月28日は電車の大幅な遅延により商学部、政治経済学部

説明会に参加できなかった生徒が多数いた。昼のキャンパス間の移動は各自に任せられたが、午後の集合に遅刻者はなかった。9月30日は西武池袋線小手指駅から大学スクールバスにより一斉に移動したが、これも特に混乱なく行なわれた。

いずれの説明会でも多くの生徒が熱心にメモを取っており、学部選択の関心の深さが伺えた。また説明会後に生徒に対して実施したアンケートには、第2学年になり学部説明会を受けたことで、進路選択を現実的に考え始めた、というものも多数見られたことから、この時期に学部説明会が行われることは有意義であると言えるだろう。また理工3学部でのパネルディスカッションでは、質疑応答での活発な発言が見られた。在学中の学生に直接大学での生活や学習、研究等についてたずねられるという点が、まさに生徒の興味の中心にあることを示していると考えられる。このことから、17年度以降の進学指導において、理工3学部以外の学部においても、学生（特に学部4年生以上）とのパネルディスカッションが行なわれることが望ましいと考えられる。このことは生徒が学部で学ぶ分野や大学生活のミスマッチを生まないためにも有効であろう。

b. 理工学部説明会

6月11日（土）に西早稲田キャンパスにて理工3学部説明会が行なわれた。対象は第2学年理系進学希望者であった。理工3学部による「付属・系属校生徒のための進学説明会」は13時30分～17時25分の時程で行なわれ、生徒は教室を移動しながら、自身の興味のある学部・学科の話を聞いた。また、この日の午前中には本庄学院独自の取り組みとして、希望者に対して、理工3学部のいくつかの研究室を訪問する、ということを行なっている。16年度は、総合機械工学科、建築学科、機械科学・航空学科、電気・情報生命工学科、教育学部理学科（生物学専修・地球科学専修）からの協力を得た。学院生たちは、研究の現場を垣間見ることができ、今後の進路の参考とすることができた様子であった。

c. サマーセミナー

7月15日（金）・16日（土）に開催した。16年度は両日とも8講義を設定し、13学部から計16名の教員を招いて、専門分野に関する講義を行なった。いずれの講義も生徒の興味をひくものであり、学部進学を考える上でおおいに参考になった。なかには参加者数が100名を超える講義もみられ、多くの生徒が進路選択に高い意識を持っていることがうかがわれた。ただし、参加者の総数は15年度に比べて大幅に減少しており、生徒の参加率を上げるための改善策を講じる必要があるだろう。大学キャンパスとは距離的に離れた環境にある本学院生徒にとっては、今後も発展させていくべきプログラムである。

d. 学部進学準備ウィーク

16年度は推薦学部発表の翌日（1月26日）から2月1日までの1週間で実施した。15年度と同様、期間中の3、4时限目をコアタイムとし、学年全員を集めた企画を実施した。1、2时限目は進路別にグループ分けし、基礎の復習、大学への接続となる発展的内容について学習した。理系進学者は5、6时限目に数学の試験を実施し、学部進学に備えての学力を再確認させた。本行事も3年目となり、スケジュール、グループ分け、講義内容などで改善すべき点も見えてきた。ウィーク終了時に

実施した評価アンケートを解析し、17年度の改善策を検討中である。

3、4時間目の講演会等は以下の通りである。

- ・学生生活課、GEC、留学センターの役職者を招いての講演
- ・学術院教員、金融企業社員を講師に招いた投資・金融教育
- ・本学院卒業生による学生生活・就職・大学院進学のパネルディスカッション
- ・本学院専任教員の留学体験、学生時代の研究活動についての講演
- ・クラス対抗球技大会
- ・選択科目「ア・カペラ」・「合唱」発表会

e. 学部開放科目

本学院は、大学キャンパスへの移動時間の関係で学部開放科目の受講は、水曜日と土曜日が半日であるので、主にこの両日の午後を使った参加であると思われる。16年度は夏季集中講座に若干名の受講があったが、もっと本学院の生徒に対してもPR等周知をしていき、より多くの履修者を出すことが肝要であると思われる。

⑧生徒指導

本学院は、入学定員 320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。16年度は、15年度に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。第1は「本学院のよき伝統である自由な校風を維持していこう」ということ。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。第2は「尊厳ある一人の人間として、志や気概を持って行動しよう」ということ。多様なタイプの人が集う本学院において、互いに切磋琢磨していくように目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。第3は「他者を思いやり、仲間を大事にしよう」ということ。いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上にもつながっていく。校則が少ない本学院であっても、各人が思いやりをもって行動すれば、問題は生じないはずである。集会などで、こうした心構えを生徒に説き、しっかりと実践するように促した。

上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。学院生としての自覚を持つよう繰り返し指導を行なうとともに、教員は生徒をより確実に把握するための取り組みを一層強化する必要がある。

III. 生徒

①生徒受け入れ

a. 入学試験全般

17年度入試の志願者総数は 2,696名。一般入試・帰国生入試の2次試験日が男子で千葉県立高校、女子で神奈川県立高校の入学試験日と重複したことにより、16年度から 116名減少した。この2県以外からの国内志願者数に大きな変動はなかった。帰国生の志願者数は、定員枠拡大（40名→45名）もあり、続伸して 298名となった。入学者数は 336名、内訳は男子 190名（前年度比-17名）、女子 146名（同+18名）であった。出身地（最終在籍中学校の所在地）別の入学者数は下表のとおりである。埼玉県出身者が減少傾向にある一方、海外出身者が増えている。群馬・神奈川・千葉の3県からの入学者も増加した。

埼玉	東京	群馬	神奈川	千葉	他道府県	海外
133	78	30	20	15	10	50

入試広報として、本学院での説明会を3日6回実施した（7月・9月・11月）。また、早大附属・系属7校合同説明会（7月3日）、海外3コース（13都市）の学校説明会・相談会、出版社・学習塾等主催の説明会（23会場26日）に参加した。受験生・保護者等との個別相談数は、1,280件で前年度ほぼ同数であった。

学校見学案内は、海外在住者に限定して、入試期間・土日祝日・学校行事日を除いて随時行なった。16年度の案内は 130件で、増加が続いている。

b. 入学試験

下記の定員変更を行なった。一般入試・帰国生入試の1次試験は、例年通り早稲田・本庄の2会場で実施した。

一般入試	男子	100名	（前年度 105名）
帰国生入試	女子	10名	（同 5名）
α選抜	男子	45名	（同 50名）
	女子	30名	（同 25名）
I選抜	男女	20名	（同 男子15名・女子5名）

入学試験区分別の入学者数は、次のとおりである。一般入試、帰国生入試とともに、女子の入学率（合格者数に占める入学者の割合）が男子を大きく上回っている。

	男子	女子	合計
一般入試	81	66	147
帰国生入試	17	13	30
α選抜	46	38	84
I選抜	19	10	29
合計	163	127	290

c. 指定校推薦

指定校推薦による入学者数は次の通りである。推薦率が上昇し、16年度に比べ3名増加した。

	男子	女子	合計
一般指定校	14	12	26
地元指定校	13	7	20
合計	27	19	46

d. 入学決定者の集い

17年入試の入学決定者の集い参加者数は 301名（男子 171名、女子 130名）で昨年を上回った。集い後のアンケートによると、本学院のカリキュラムや特徴、特に英語、数学、国語の授業等について入学までにどのような準備をしたらよいかよく理解できた、入学後の不安が和らいだ、入学後の学校生活が楽しみになった等、入学者への動機づけの観点からは概ね肯定的な結果となった。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集14名、秋季募集17名の合計31名であった。いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は次の表の通りである。受給者の合計は30名であり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

奨学金名	奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の支給予約）	12
地方公共団体奨学金	埼玉県
	東京都
	神奈川県
	東松山市
	大田区
	福島県
民間団体奨学金	2
合計	30

また、埼玉県授業料等軽減補助金は98名、埼玉県在住者を対象にした奨学のための給付金等を受けている者は15名であった。さらに国の制度である就学支援金受給者は第1学年 181名、第2学年 192名、第3学年 116名で、合計 539名となっている。

b. 保健室

学校保健計画に基づいて運営した。

保健教育としては各学年で健康教育講演を実施した。適切な時期に適切な内容で実施できるよう、毎年見直しをする必要がある。また教職員対象に救急法講習会を実施しているが、より多くの参加者が見込めるよう、工夫が必要である。個人の危機管理意識の向上のために常に啓発していきたい。

健康管理としては生徒定期健康診断をもれなく実施した。17年度より運動器検診と任意の色覚検査が導入され、事務作業が煩雑になり、例年より時間を要した。また医師による健康相談（眼科・耳鼻咽喉科・歯科・整形外科）を実施し、生徒、教職員の健康問題をサポートした。

保健室利用は例年より多く、インフルエンザが大きな流行になったことが原因と考

えられる。電光掲示板やLHRを活用した予防教育を徹底したが、今後も正しい情報提供、感染拡大の防止に努めたい。

c. カウンセリング

毎週水曜日と土曜日の午後に、カウンセラー（臨床心理士）による相談を実施している。16年度は障がい学生支援室と連携して、生徒のサポートにあたるケースがあった。今後も必要に応じて、障がい学生支援室と連絡をとりながら、的確なサポートができるよう努力したい。

保護者会で大学の心理専門相談員より相談室の広報をしたためか、相談室の利用者（保護者を含む）が急増した。生徒だけでなく、保護者にも周知する機会を設けることが重要であると感じた。

d. 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額5,000円を徴収している。

15年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。現行制度の利用者および利用総額が増えることは予め折り込んでいたが、増加幅については、当初の予想を超えた。

15年度は支給人数が延べ608人（実数230人）、支払総額が3,102,798円であったのに対し、16年度は支給人数が延べ770人（実数270人）、支払総額が4,350,717円となった。延べ人数・実数とも増加傾向がみられ、支給上限額となる10万円支給者が8名に達していることから、17年度以降は、年間支給上限額の見直しなど新制度の改善を検討する必要がある。

e. 学校安全管理

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や堀がない。こうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。

現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員（日中6名、夜間4名）による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

埼玉県本庄警察署との間で相互連携に関する協定書を締結しているが、公立校と比較し地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考える。

東日本大震災の教訓を踏まえ、地元消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を11月17日（木）に実施し、生徒の防災意識の高揚を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招いて情報教育セミナーを行なった。

③生徒進路

a. 進学学部

16年度は343名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）ごとの男女別の進学者数は次の表の通りである。

学 部	学科	専 攻	専 修	進学者数		
				計	男子	女子
政治経済学部	政治学科			28	7	21
	経済学科			33	19	14
	国際政治経済学科			12	6	6
法学部				47	29	18
文化構想学部	文化構想学科			25	14	11
文学部	文学科			14	8	6
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	5	3	2
			生涯教育学専修	1	1	0
			教育心理学専修	2	2	0
		初等教育学専攻		1	0	1
	国語国文学科			3	1	2
	英語英文学科			1	1	0
	社会科	地理歴史専修		6	6	0
		社会科学専修		10	9	1
	理学科	生物学専修		2	1	1
		地球科学専修		1	1	0
数学科				4	2	2
	複合文化学科			4	3	1
商学部				33	21	12
基幹理工学部	学系 I			1	1	0
	学系 II			14	13	1
	学系 III			15	13	2
創造理工学部	建築学科			9	3	6
	総合機械工学科			4	3	1
	経営システム工学科			5	5	0

	社会環境工学科	2	1	1
	環境資源工学科	2	2	0
先進理工学部	物理学科	3	3	0
	応用物理学科	1	1	0
	化学・生命化学科	3	1	2
	応用化学科	1	1	0
	生命医学科	3	2	1
	電気・情報生命工学科	8	7	1
社会科学部	社会科学科	20	18	2
人間科学部	人間環境科学科	0	0	0
	健康福祉学科	0	0	0
	人間情報科学科	2	2	0
スポーツ科学部	スポーツ科学科	3	3	0
国際教養学部	国際教養学科	15	6	9
	合計	343	219	124

b. 他大学進学

16年度卒業決定者のうち、早稲田大学推薦辞退者は3名だった。2名は国内大学、1名は米国の大学への進学を志している。

IV. 研究活動

①教員の研究成果

a. 個人研究

○著書（分担執筆）

『実践国語科教育法「楽しく、力のつく」授業の創造』（町田守弘編）

「古典の授業」「国語科の評価」 学文社 16年4月

『日本の政策課題』（岩崎正洋編著）

第2章「生殖医療」 八千代出版 16年7月

『平安後期 賴通文化世界を考える－成熟の行方』（和田律子・久下裕利編）

「賴通の家集蒐集事業」 武蔵野書院 16年7月

○論文

「国際バカロレア（IB）の教育手法を踏まえた高等学校での授業実践例」

『英語教育』65-5 16年7月

「関東山地北縁部の低角度構造境界」（共著）『地質学雑誌』122-7 16年7月

「グローバル人材育成に資する国際バカロレア－ディプロマプログラムを中心
に－」『グローバル人材育成教育』3-2 16年9月

「한일 파트너십 구축의 초석이 되는 교육 교류」

『유네스코 뉴스』723 16年9月

「Direct detection of antihydrogen atoms using a BGO crystal」（共著）

『Nuclear Instruments and Methods in Physics Research A』 16年11月

「説得型プレゼンテーション能力の向上－国際バカロレアの探究型学習を取り入

れるー」 『EIKEN BULLETIN』 28	16年11月
「ロクロを挽く女：インドネシア・スラウェシ島、プルタンの民族誌」	
『東南アジア考古学』 36	16年11月
「3～5世紀の河西墳墓画像に見られる「塙」について」	
『史滴』 38	16年12月
「国際バカロレアの教育手法とリーダーシップ教育との関係性 -Approaches to learning (ATL)に着目して -」	
『国際教育研究所紀要』 22・23 (合併号)	17年3月
「国際バカロレアの外国語科目的教育手法とその効果（英語運用能力の向上と内発的動機づけに焦点をあてて）」	
『グローバル人材育成教育』 3-3	17年3月
「陶工、医者になる」	
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要 教育と研究』 35	17年3月
「初等関数の微分公式の証明を眺める」	
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要 教育と研究』 35	17年3月
「公民科における「若者の貧困と社会的排除」の授業」	
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 35	17年3月
○口頭発表	
「国際バカロレア(IB)の教育手法を参考とした探究型・概念理解型の英語の授業」	
日本英語教育学会第1回英語教育の国際会研究会	16年5月
「土器づくりの古層：インドネシア民族誌を中心に」	
日本考古学協会第82回総会	16年5月
「公民科「政治・経済」における「若者の貧困と社会的排除」の授業」	
日本公民教育学会プロジェクト研究に関する公開研究会	16年6月
「土器とジェンダーの比較民族誌」	
早稲田文化人類学会第19回研究集会	16年7月
「英語学習の生涯接続：批判的思考力・表現力獲得のための英語学習」（共同）	
英語教育の国際化研究会	16年7月
「EFL lesson based on the pedagogy of the International Baccalaureate: Intrinsic motivation and multiple intelligences」	
International Symposium on Multiple Intelligences in Meiji University (MIIM2016) - Spreading and Deepening Multiple Intelligences Theory	16年7月
「The Effectiveness of Concept-Based Teaching and Learning (CBTL) of the International Baccalaureate: Increasing Intrinsic Motivation for Additional Language Learners.」	
The 21st Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (国際)	16年8月
「高校数学での深い学びと生徒の活動評価」	

- 日本数学教育学会第98回全国算数・数学教育研究（岐阜）大会 16年8月
「反転授業における指導効果の研究 一動機づけ論と J i T T に着目してー」
- 日本数学教育学会第98回全国算数・数学教育研究（岐阜）大会 16年8月
「インド・ニューデリーおよびその近郊における土器づくり民族誌」
- 東南アジア考古学会第 250回例会 16年9月
「The Effectiveness of the Pedagogy of Additional Language Learning of International Baccalaureate」
- 日本国際バカロレア教育学会第1回全国大会 16年9月
「日本におけるIB教育の課題と展望」（共同）
- 第1回日本国際バカロレア教育学会 16年9月
「高校数学での深い学びモデルの実践と研究」
- 日本数学教育学会第49回秋期研究大会 16年10月
「国際バカロレア（IB）「Language B」の教育手法に関する分析：国内の英語教育との比較から」
- グローバル人材育成教育学会 16年12月
「ディプロマプログラム「Language B」に関する教育手法の分析」
- 日本アクティブ・ラーニング学会 16年12月
「反転授業における生徒の事前学習に関する研究－心理学的背景を鑑みてー」
- 早稲田大学教育総合研究所第22回公開研究発表会 17年1月
「陶工、医者になる。：バングラデシュ・ヒンドゥー社会に残された呪術的思考」 早稲田文化人類学会第18回総会・シンポジウム 17年1月
「日韓イコール・パートナーシップ構築のための国際理解教育研究」
- 早稲田大学教育総合研究所第22回公開研究発表会 17年1月
「Effectiveness of the International Baccalaureate Theory of Knowledge (TOK) Approach in Fostering Speaking Skills among Japanese Additional Language Learners」
- 日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会 17年3月
「アクティブ・ラーニングの手法を用いた国際理解教育－地域の特色を生かしたインバウンド観光プランの創造を通してー」
- 日本私学教育研究所平成28年度委託研究員研究成果報告会 17年3月
- コンサート
『それからのキリギリス』（自身の台本作曲による音楽劇）
はにぽんプラザ 出演：ぐるうふ「歌団缶」 16年11月
- その他
学会司会
「特集 テクストから問い合わせ～ジェンダー／セクシュアリティ論の新視角」
有島武郎研究会第60回全国大会
- 記事
「한일 파트너십 구축의 초석이 되는 교육 교류」
ユネスコ 한국위원회『ユネスコ ニュース』723 16年9月

「組体操の重大事故を防ぐために一体育行事における学校の安全配慮義務」

『読売新聞 教育×WASEDA ONLINE オピニオン』2016年10月3日 16年10月

論文13本、口頭発表17件となり、15年度より論文が4本、口頭発表が3件増加した。

②学内研究費による研究

a. 特定課題（B）

「外国籍住民向け多言語版ハザードマップの作成状況と利用実態に関する研究」
238千円

「高校数学における「深い学習」を促す学習モデルの構築と実践」 238千円

「日韓陶芸技法（施文具・回転図章）の伝播に関する調査・研究」 200千円

「人権のグローバル化に即した法教育の研究－高等学校公民科における指導計画
再構築を中心に－」 238千円

「三波川變成岩のユニット境界に見られる変形構造の解析」 200千円

「墳墓画像による五胡十六国・北魏時代の中国西部社会の研究」 238千円

b. 特定課題（基礎助成）

「インド・チェンナイにおける土器づくり民族誌の研究」 210千円

「日韓陶芸技法（施文具・回転図章）の伝播に関する調査・研究」 210千円

「墳墓画像による五胡十六国・北魏時代の中国西部社会の研究」 210千円

c. 特定課題（新任の教員等）

「国際バカロレア（IB）の探究型概念学習と英語表現能力伸長との関連性」
180千円

「QuarkNetを利用した宇宙線計測における高校生の実験法学習に向けた研究」
210千円

d. 一般研究費（教育総合研究所）

「反転授業における生徒の事前学習に関する研究－心理学的背景を鑑みて－」
300千円

e. 公募研究（教育総合研究所）

「日韓イコール・パートナーシップ構築のための国際理解教育研究」 220千円

特定課題（B）は15年度の2件から3倍増、特定課題（新任の教員等）は新任教員の着任により2件となった。特定課題（基礎助成）は数的には変化はないが、交付金額の減少が気にかかる。

③特別研究期間

「ポルトガルにおける科学教育について」

④研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年1回刊行している。16年度は第35号を刊行し、論文5本を収録した。

V. 教育研究施設

①学内施設

a. 教室

教室は普通教室23、ゼミ室4、理科実験・講義室5、情報処理室2、美術室1、体育

講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、C A L L 教室1、大教室1で構成され、各教室にはI T機器とスクリーンが設置されている。

b. 稲稟ホール

15年度より稼働を始めた稻稟ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラバンの活動、学外の機関の利用等を含め年間の施設利用回数は数十回を超える。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていると言える。

c. CALL教室

最新のCALLシステム（CALLはComputer Assisted Language Learning の略で、コンピュータを使って語学学習を支援するシステム）を搭載した教室であり、学習時に各ディスプレイの上に設置されているカメラとマイク付きヘッドホンを利用して、対話形式で相手の表情を確認しながら対話練習することができる。

d. コンピューター・インターネット環境

95号館を使用するようになってから、P C室2室（46名対応）を中心に授業や課外活動を展開している。P C室は「情報」・選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、生徒の創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室にL A Nの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内3カ所に無線L A Nのポイントがあり、情報コンセントのない場所でもWiFiでノートP Cやモバイル等のインターネットへの接続が可能である。このような環境のため、ノートP CやiPadを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

e. 体育施設

1) 学院体育館

95号館からの距離が遠く、体育の授業をはじめ学期集会等、移動の際にやや時間がかかる。バスケットボールコート2面分の広さがあり、授業での使用頻度は非常に高い。また放課後クラブ活動でもバスケットボール部、バレー部、体操部、剣道部が交替制で使用している。

2) 共通教室等体育館

バスケットボールコート1面の広さがあり、授業では主にバドミントン、卓球、ダンスを行なっており、学院体育館同様使用頻度は非常に高い。放課後のクラブ活動では、卓球部、バドミントン部、剣道部が使用している。

3) サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かした授業展開ができている。授業や球技大会等の行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

4) ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稟際、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難場所として定められており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビーパークが使用している。

5) 野球場

主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目の授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点として、クラブ活動では硬式野球部が使用している。

6) テニスコート

テニスコート6面（クレー4面・オムニ2面）は、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7) 部室棟

部室とトレーニングルーム、ミーティングルームがあり、多くの運動部が共用している。

8) 屋外施設全般

施設の整備、維持管理体制を体育科と各運動部で模索しながら、あくまでも活動する生徒自身が主体的にその管理を進め始めている。

f. 図書室

16年度より運営に業務委託を導入したが、利用者へのサービスはほぼ従来通り行なつており、委託に伴う大きな混乱等はなかった。

15年度に90－7号館へ移転したことに加え、16年度から開室時間を18時まで1時間延長したことにより、入室者数は着実に増加している(前年度比約50%増)。但し、図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

g. 保健室

ベッドは4床あり、通常の時期は充分な数であるが、時期によっては全部が埋まることがある。通学距離が長い生徒が多く、早退するにもバスや電車、新幹線の本数が限られているため、長時間休養せざるをえないケースも散見される。急な傷病により、ひとりで早退するのが困難な場合等、家庭で事前に想定し、話し合っておく必要性を感じる。

保健室から学院体育館、共通教室棟、稲稜ホールまで距離があり、そこでの急な傷病への対応が遅れがちであった。改善が17年度の課題である。

h. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている(運営は早稲田大学生協に委託)。生徒の食堂利用時間は、主に11時から11時20分までのコーヒーブレイクと13時10分から13時50分までの昼休みである。食堂の座席数は442であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。そのほかの付帯設備として、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されている。

食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会(個別相談)や学年集会などさまざまな学校行事にも利用されている。

i. その他

早稲田大学は、芸術活動の発展を目指し「キャンパスがミュージアム」(芸術作

品のキャンパス内展示により芸術作品と身近に触れ合える「場の創造」)を標榜しており、本学院も大学が収蔵する絵画や写真の公開を積極的に進めている。16年度は次の絵画4点、写真1点が展示された。

『ローズの森 Foret de printemps』嶋田しづ	95号館 1階会議室
『いつもの散歩道A』井上悟	95号館 1階ワークショップエリア
『マンドリンのある卓上静物』笠井誠一	95号館 1階ワークショップエリア
『丘を巡る日』藪野健	95号館 2階交流ラウンジ
『本庄高等学院空撮2013.10.28』中村孝之	95号館 1階ワークショップエリア

②スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。バスの台数・種類を変えて今年度を迎えたが、朝のバスのダイヤがあいかわらず過密となったので、安全性を確保するためにも、バスの台数に余裕があることが望まれる。4月から稲稟祭(10月)までの本庄駅行の最終バスも乗り切れない状況が続いている、始業時も雨天の日等には本庄便に乗りきれない状態が慢性化し始業時刻に間に合わない生徒が多くいた。さらに、長期休業中には往路・復路ともに満員で乗り切れない状況が続いている、生徒の安全を考えても早急に解決すべき問題である。

③早苗寮

早苗寮の可能な受け入れ寮生数は全学年・男女総計で136名である。新入寮生を募集する際、希望者が多くその要望を100%かなえることは難しい状況が続いている。16年度についても厳しい状況であったが、18年度4月には本庄早稲田駅南側に女子寮が新設され、男女ともに入寮難を緩和できる見通しとなった。

教務、寮担当主任、寮委員、組主任等を中心とした定期的な学習・生活指導はほぼ例年通りに行なわれている。17年度以降もこれまでの経験を活かしつつ更に効果的かつ効率的な指導が求められる。寮自治会が自主的・積極的な動きを見せていて、年中行事の企画・運営はもとより、コンパクトで機動性のある班単位、フロア単位で基本的な事項の確認や日常の些細と思われる問題解決にも積極的に取り組む姿勢が見られる。

④新生徒寮・体育館整備事業

女子生徒の入寮希望に対応するため、早苗寮とは別に、新しく女子専用寮の建設を計画し、工事が進んでいる。これは約2508m²の敷地に地上4階、鉄筋コンクリート壁式構造、延床面積3700m²、最大入居数120名の建物で、18年2月竣工予定である。これまで、入居希望に応えられず、そのため入学を辞退した受験生もあるので、これが利用できるようになれば、そうした問題もなくなり、世界各国、全国各地からの入学者を受け入れることができ、また、通学時間を縮減し、勉学・公認団体活動や各種プログラムに対して時間を割きたいという生徒のニーズに対応できることになろう。女子専用寮の利用開始にともない、早苗寮は男子専用寮(男子136室)とする予定である。

また、本学院Ⅲ期整備事業である体育館の新築工事についても17年3月の大学評議員会で正式に承認され、現校舎の西側用地に建設されることになった。現在は基

本設計の段階で、17年11月着工、18年11月竣工予定である。

VI. 社会・大学との連携

①保護者の会

16年度は6月4日（土）と12月18日（日）に保護者会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、2回とも全体会の後、生徒寮保護者会が実施された。2回の保護者会とも9割前後の保護者が参加し、関心の強さが窺える。出席率の高さは保護者会の開催を土日に行なったため参加しやすかったことも一因であろう。各保護者会で、保護者アンケートを実施し、本庄高等学院に対する保護者からの意見を聞いた。学院への様々な要望・感想をいただいた。

②卒業生との連携

a. 同窓会

役員の尽力で、同窓会の体制が整い、活動は更に活発になった。16年度の本学院教育への連携・協力体制も万全であり、本学院からの依頼に対し、その意向を汲み適切に対応してくれた。

本学院からの依頼として、例年通り、キャリア教育の一環としてのウインターセミナーへの講師派遣、文化祭での展示の協力などがあった。いずれも十分な成果を収めることができた。

同窓会の活動自体も充実していた。役員会は定期的に開催され、更なる活動の充実に向けて、意見の交換の場を設けている。また、就職活動支援セミナーは、学生O B・O Gから好評を得ている。また、同好会活動では、ビジネス交流同好会、ゴルフ同好会など各種レクリエーションの場を提供している。ホームページには、クラス会の開催案内、近況報告、リレーエッセイ等が掲載され、その情報は随時更新されている。

17年度も同窓会との連携を強め、同窓生の追跡調査を行なうなどして、同窓生の知的資源を更に活用することも期待されている。

b. ウィンターセミナー

12月10日（土）に本学院卒業生10名、早稲田大学キャリアセンターより1名を招き11件の講義を行なった。本セミナーは、生徒が先輩の経験談を聞いて、自分の将来を真剣に考えて適切な進路選択をし、本学学部学生、さらに社会人となる自己の将来の具体的なイメージを確立することを趣旨として行なわれている。

期末試験終了翌日の開催にもかかわらず、参加した生徒は熱心に聴講し、終了後時間を過ぎても多くの質疑応答が行なわれていた。ただし、3年生が選択科目試験や卒業論文執筆で多忙な時期のため、参加率が低かった。

講師と教員での懇談会では卒業生の本学院に対する強い想いが伝わってきた。

③地域との連携

a. 本庄稲作プロジェクト

地域と連携を図る試みとして「本庄高等学院稲作プロジェクト」を実施している。地元農家との交流を通じて、農業を取り巻く様々な事柄を体験的に学習することが目的である。農業を軸に、様々な教科や科目が横断的に取り組むことのできる企画

である。16年度も美里町農林課と水田農家の協力のもと、6月上旬と9月中旬に美里町下児玉の水田で農業体験を企画した。選択科目「食文化」の授業時間帯に組み込む形で行ない、受講生35名が田植えと稻刈りを体験した。稻刈りとともに米作りのサイクルや営農に関する興味深い話を聞くことができた。農業を通じた地域との連携は着実に進んでいる。

b. どんぐりプロジェクト

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災復興支援を目的とし、宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し防災に役立てようとするもので、有志生徒16名が本庄キャンパスでどんぐりの苗木の育成を行っている。具体的には、授業がある日は当番制で本庄育苗地の水やりと観察日誌の記録を行ない、また月に1度程、学部学生やWAVOC のスタッフたちとミーティングを行なって、プロジェクト参加者内の親睦を図り、活動を確認している。8月20日

（土）～22日（月）には生徒16名・教員1名とWAVOC スタッフとで気仙沼植樹ツアーワークを行ない、実際に防波林の場所を見たり、現地の方の話を聞いた。

c. 六校祭

8月21日（日）に、本庄市内の6つの高校が合同で文化祭を行う「六高祭」が開催された。この六高祭は、昨年度に本庄市合併10周年・はにぽんプラザ（本庄市新施設）オープンを記念してスタートしたものである。本庄高等学院からは、書道部、美術部、クイズ研究会、政治経済部、ピアノ部、S G H思い愛隊、さらに生徒会・中央委員会有志による自転車マナーアッププロジェクトが参加し、日頃の成果を披露した。また、生徒会執行部のメンバーも、この「六高祭」の実行委員として活躍した。

d. ボランティア活動

16年度は以下のようなボランティア活動を行なった。

第3学年による全市一斉清掃

プラスバンド部による本庄児玉病院での慰問演奏

硬式野球部による少年野球チームとの交流

スーパーサイエンスクラブ河川研究班による以下のプログラム

- ・本庄市立藤田小学校での出張授業
- ・同小学校と合同での河川調査
- ・「川の探検隊」（本庄県土整備事務所主催）における補助スタッフ

e. 施設の開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行なっていない。しかし、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会や、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式に会場を例外的に貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

④教員の社会活動

a. 学外講師

上尾市健康福祉課「健康ウォーキング・認知症予防講座」 16年2月・10月
おおくぼ山スポーツクラブスポーツ指導研究会
「スポーツ指導における諸問題および研修」 16年4月～17年3月（9回）
学研総合研究所「社員研修会」
北本市健康福祉課「健康ウォーキング講座」 16年10月
中村学園女子中学・高等学校「教員研修会」
本庄市民総合大学「唱歌講座」
本庄市立南公民館「唱歌」
大和市健康福祉課「健康づくり教室」 16年11月

b. 学会役員

魏晋南北朝史研究会監事
日本国際バカラレア教育学会大会組織委員長
日本スプリント学会理事
日本地質学会代議員

c. その他

おおくぼ山スポーツクラブ代表
埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部常任委員（北部広報部長）
日本英語検定協会英検面接委員
日本英語検定協会TEAP面接委員
日本サッカー協会3級審判員講習受講・ライセンス取得
日本サッカー協会C級指導者講習受講・ライセンス取得
本庄市陸上競技協会理事
本庄市行政不服審査会委員

⑤教科書等の執筆

a. 教科書等の編集・執筆

『All Aboard! English Communication I』 東京書籍
『New Discovery English Communication I』 開隆堂出版
『国語総合』 東京書籍
『新編国語総合』 東京書籍
『精選国語総合』 東京書籍
『古典B』 東京書籍
『新編古典B』 東京書籍
『精選古典B』 東京書籍
『古典A』 東京書籍

b. 指導書・参考書の執筆

『All Aboard! English Communication I』 東京書籍
『New Discovery English Communication I』 開隆堂出版

⑥外部資金の導入

a.	S S H (スーパーサイエンスハイスクール) 基礎枠事業費	3,000千円
b.	S G H (スーパーグローバルハイスクール) 受託費	8,100千円
c.	その他 さくらサイエンスプラン Singapore National Junior College 受け入れ資金 日本私学教育研究所委託研究 「アクティブ・ラーニングの手法を用いた国際理解教育—地域の特色を生かしたインバウンド観光プランの創造を通して—」	3,000千円 200千円

⑦大学教育との連携

a. 教育実習

16年度は2週間（5月23日（月）～6月3日（金））および3週間（5月23日（月）～6月8日（水））に20名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は従来の日程である5月12日（木）に行なったが、実習生がより充実した準備をして実習に臨めるよう、4月から指導担当教員と打ち合わせが開始できる体制を整えた。実習生は教壇実習および体育祭の運営や部活動指導にも参加し、学校現場の業務の体験に努めた。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

b. 競技スポーツガイダンス

15年度に3回実施したのに続き、16年度は下記の通り、4回の競技スポーツガイダンスを実施した。部活動への取り組みの在り方、スポーツを行なう者の基礎をなす食事・栄養の問題、本学院において多発傾向にあるスポーツ障害を如何に予防するか、という観点で行われた。10月実施のガイダンスの中では、それに加えて部活動を行なうまでの基本、練習場の整備・管理、部室の運営・管理、生徒会予算で購入した物品の管理等について注意した。これは、今までこのような注意が徹底されず、極めてルーズな状況であったことを受けての注意喚起であった。また、それに先だって、メール等による各部長への連絡体制が整備された。新たな試みのため、すべての部長が対応したわけではないが、対応した部長の意識を良い方向に変化させたのではないかと考えている。この効果もあって、ガイダンスへの参加が増加した。

今後、他者あるいは他機関に依存しがちな「競技ガイダンス」から本庄高等学院独自の「育成プログラム」にどう発展させるか、生徒や教員の意識をさらに高めていく方法は何か、地域貢献にどのように結びつけるか等の課題はあるが、2年目を迎えて「競技スポーツガイダンス」は確実に進展していると思われる。

第4回（5月11日（水））

早稲田大学本庄高等学院 運動部に期待すること」

石井昌幸（競技スポーツセンター副所長、スポーツ科学部准教授）

障害予防の基礎知識

長澤 良介（代々木病院）

基礎栄養学

田中 智美（早稲田大学スポーツ栄養研究所）

参加生徒 120名 教員 5名

第5回（10月19日（水））

障害予防の基礎知識

阿部健太郎（スポーツ科学研究科修士課程1年）

濱田麗（スポーツ科学研究科修士課程1年）

参加生徒 214名 教員 7名

第6回（12月22日（木））

シンスプリントの予防と対策

阿部健太郎（スポーツ科学研究科修士課程1年）

参加生徒 104名 教員 5名

第7回（3月13日（月））

附属校で学ぶこと 部活動で学ぶこと

松井泰二（スポーツ科学部准教授）

参加生徒 178名 教員 11名

c. 学部・大学院の授業担当

学部・大学院等における授業担当状況は次の通りであり、15年度から変化はない。

- ・文学学術院 1名
- ・教育・総合科学学術院 2名
- ・人間科学学術院 1名
- ・スポーツ科学学術院 1名

⑧募金

16年度の教育振興資金寄付件数は83件、寄付金額は15,620,000円であり、その他にも理系教育褒賞やクラブ活動指定の寄付を9件、4,096,928円受け入れた。今後も引き続き、懸案となっている新体育館などの建設を目指し、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

VII. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

16年度は定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が21回開催された。15年度比7回増の臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が数回含まれる。17年度は、日常の生徒指導を更に充実させることにより、未然に問題の発生を防ぐなどの手立てを講じ、生徒指導を議題とする臨時教諭会の開催を抑制したいものである。

年度当初、会議時間の短縮化に留意したが長時間にわたる会議が結果的には多くなり、目標は実現されなかった。これは特に16年度は新カリキュラムに派生する細

目事項決定や新たな検討議題が多かったことによる。今後は、提案方法の見直し、発言の簡略化、議事進行の迅速化等を図る必要がある。

b. 委員会

16年度は15年度と同様の17の委員会が設置された。委員会は、1年間を通じてそれぞれの役務を果たしたと考えている。各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次のとおりである。

教科主任会：予算関係、図書委員会開催、新カリキュラム関連大久保山学の細目決定、年間行事の検討、卒業論文の提出遅れの処置、留学の内規や扱いの整備検討、その他教諭会審議事項の事前検討

学年主任会：奨学生の選考、生徒表彰の選考

生徒指導委員会：日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施、及び外部有識者による教員研修実施

いじめ防止委員会：生徒間のいじめ問題の防止やいじめ問題に関する外部有識者による教員研修実施

人権教育委員会：人権教育講演会の実施、人権教育の実践報告

寮委員会：早苗寮の生活指導、寮規則の検討

広報・出版委員会：『杜』・『研究紀要』の編集刊行

情報管理運営委員会：全般的情報の管理、授業評価の実施

入試検討委員会：入試区分定数の見直し、『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加等

施設検討委員会：新体育館フロアの具体的計画の検討

進路指導委員会：サマーセミナー、ウインターセミナー、進学準備ウイークの立案及び実施、卒論報告会の準備及び実施、学部説明会の検討、卒論の評価や手引書の改訂、提出時期等の検討

学校行事運営委員会：体育祭、稲穂祭の立案及び運営、芸術鑑賞会の検討

S S H 委員会：S S H事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、S S H成果報告会の立案及び実施、文部科学省へのS S H再申請

S G H 委員会：S G H事業の立案及び実施、生徒S G H委員会の組織運営、各種交流事業や調査旅行への生徒引率、S G H成果報告会の立案及び実施、Pre-Wa ISECの実施。文部科学省への年度末（中間）報告、S G H成果報告書作成

国内外交流委員会：台湾建国高校、N J C来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率

学校評価運営委員会：学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成

募金委員会・同窓会：「30周年記念教育環境整備・充実募金」の企画と募金活動、同窓会活動への参加と協力

c. 教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の通りである。16年度から専任教諭が2名増加した。

教科別構成

教 科	専任教諭	非常勤講師	合計
国 語 科	5	7	12
地理歴史・公民科	7	13	20
理 科	7	8	15
数 学 科	6	6	12
保健体育科	5	4	9
芸 術 科	1	2	3
英 語 科	9	8	17
情 報 科	1	2	3
家 庭 科	1	3	4
第二外国語	0	5	5
養 護	1	0	1
合 計	43	58	101

年齢別構成

資 格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率								
専任教諭	43	3	7%	12	28%	10	23%	9	21%	9	21%
非常勤講師	58	26	45%	12	21%	10	17%	3	5%	7	12%
全 体	101	29	29%	24	24%	20	20%	12	12%	16	16%

男女別構成

資 格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	37	86%	6	14%
非常勤講師	58	37	64%	21	36%
全 体	101	74	73%	27	27%

d. 教員の授業担当時間

16年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。15年度から大きな変動はない。

専任教員	13.8時間（除長期欠勤者）
役職者以外	14.6時間
役職者（教務）	7.6時間
非常勤講師	6.2時間

②事務組織

事務職員の担当別人員は次の通りである。専任教員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材サービス会社から派遣されている。なお、図書室については16年度より業務委託化した。

担当箇所・係	人数計	内 訣		
		専任教員	嘱託	派遣

事務職員計	16	7	3	6
事務所	13	7	2	4
事務長	1	1	0	0
学務係	6	4	0	2
庶務係	5	2	1	2
S G H支援	1	0	1	0
理科準備室	2	0	1	1
物理・生物	1	0	1	0
地学・化学	1	0	0	1
メディアルーム	1	0	0	1
C A L L 教室	1	0	0	1
S S H支援				
図書室	16年度より業務委託			

③生徒の出欠席・成績処理

13年度より、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「School N@vigator」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。

具体的な運用は以下の通りである。

出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。

成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

④広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は6月と12月に発行したが、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成された。『杜』は保護者の会「杜」編集委員会により年1回発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。16年度は3月に発行された。

ホームページ (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) はタイムリーなニュースやできごとを継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行なっている。

本学院保護者へ、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast®（N T Tデータ株提供）システムを導入し、災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、システムを有効に活用できている。